法養寺遺跡発掘調査報告書

ほうようじ

—— 犬上郡甲良町 ——

1984. 3

滋 賀 県 教 育 委 員 会

滋賀県文化財保護協

序

滋賀県が実施する県道彦根・八日市・甲西線の新設事業に伴い甲良町法養寺地先の法養寺遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、奈良時代から中世にかけての多くの遺物を検出し、中でも、当地域ではまだ確認されていない寺院跡の存在を示唆する瓦が出土するなど貴重な成果が得られました。

ここに発掘調査の成果を刊行することになりましたが、この報告書によって郷土の文化財への認識を深めていただくための一助になれば幸いと考えます。

最後に発掘調査に御理解をいただいた関係機関に対し厚くお礼申し上げます。

昭和59年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
外池忠雄

例　　言

1.　本書は、滋賀県が行う県道彦根八日市甲西線の工事に伴う法養寺遺跡の事前発掘調査報告である。

2.　本調査は、滋賀県教育委員会の指導により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

3.　本書は、昭和57年度に試掘調査を行い、昭和58年度に発掘調査を実施した成果である。

4.　調査および整理・報告は滋賀県教育委員会文化財保護課技師葛野泰樹が担当し、以下の協力を得た。

主任調査員：徳網克己（財団法人滋賀県文化財保護協会嘱託調査員、現中主町教育委員会文化財調査員）

調査補助員：三浦正博、重田和良、福井鉄治（以上岐阜経済大学Ｏ．Ｂ）、林　浩司・吉備浩子（佛教大学）、小川又一郎、狭間　豊（以上中京大学）、北川ともえ（京都和装学園Ｏ．Ｇ）、小山みのり・中村康子・小倉美奈子（京都女子大学）、中島美代子（京都女子大学Ｏ．Ｇ）

なお、調査を実施するにあたり地元甲良町教育委員会主任上野正之氏、下之郷の各々の協力を得た。

5.　本書の編集・執筆は葛野が当たった。遺物写真については寿福　滋氏の協力を得た。

目　　次

はじめに …… 1

第１章　位置と環境 …… 2

第２章　調　　査 …… 7

1.　調査経過 …… 7

2.　調査日誌（抄） …… 8

第３章　遺　　構 …… 10

第４章　遺　　物 …… 15

第５章　ま　と　め …… 22

図　版　目　次

図版１　上　法養寺遺跡調査地区遠景（北から）

　　下　法養寺遺跡調査地区遠景（南から）

図版２　上　試掘調査用グリットNo.８

　　下　試掘調査用グリットNo.12

図版３　上　Ａトレンチ（南から）

　　下　Ｂトレンチ（南から）

図版４　上　Ｃトレンチ（南から）

　　下　Ｄトレンチ（南から）

図版５　上　Ｄトレンチ井戸跡ＳＥ１

　　下　ＳＢ１０１（東から）

図版６　上　ＳＢ１０２（南から）

　　下　No.６＋50～No.７（北から）

図版７　上　ＳＫ１・２（東から）

　　下　ＳＲ１（南から）

図版８　　法養寺遺跡出土遺物

図版９　　法養寺遺跡出土遺物

挿　図　目　次

第１図　法養寺遺跡位置図 …… 1

第２図　法養寺遺跡位置図および周辺の遺跡 …… 2

第３図　法養寺遺跡周辺地形測量図 …… 3

第４図　トレンチ位置図および地形測量図 …… 5～6

第５図　発掘調査風景(Ｃトレンチ掘削状況) …… 8

第６図　Ａ～Ｄトレンチ、No.４＋85～No.５＋25遺構平面実測図 ……11～12

第７図　ＤトレンチＳＥ１実測図 …… 13

第８図　河川跡遺構平面実測図 …… 13

第９図　Ａ～Ｃトレンチ、No.３～No.５出土遺物実測図 …… 16

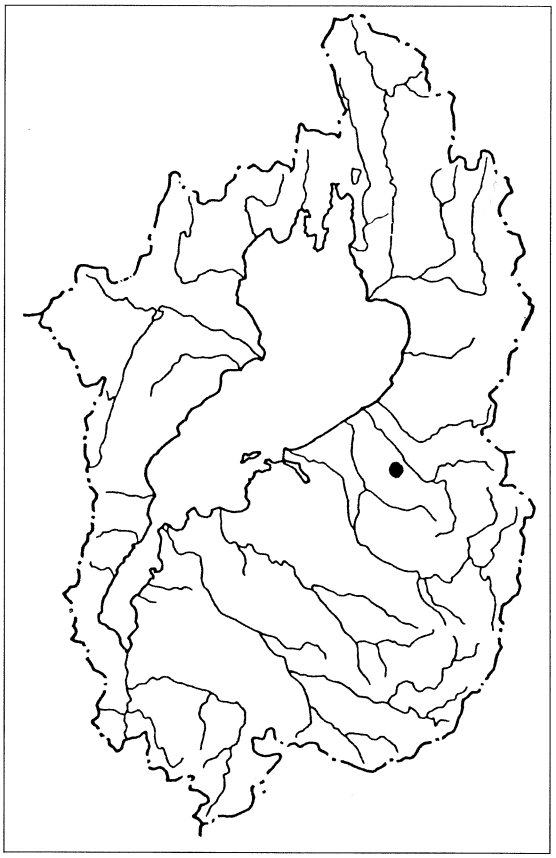
第10図　No.５・No.５＋50～No.６付近出土遺物実測図 …… 17

第11図　Ａトレンチ・No.５～No.７付近出土遺物実測図 …… 19

はじめに

本調査は、昭和57年度夏東側隣接地で県営ほ場整備事業に伴う発掘調査を実施し平安時代後半の集落跡を検出①したことから、当然、当該地にも遺跡の拡がりが予想され、同年7月試掘調査を行い遺構、遺物を確認したため、昭和58年度に発掘調査を実施したものである。また、当該地の北部には県指定甲良神社②が鎮座し、道路はその一部を通過することから甲良神社に関する遺構・遺物の存在も想起させられた。

さらに、当該地には太上郡条里制地割に合う道路が南西から北東方向にのび、古くから高野道として利用されていた。その南西部は小字不動葛城と呼称し、以前農業用水路建設の際、木造不動尊が出土したと伝えられている。現在、下之郷の桂城神社境内に小堂宇をもうけ祭られている。出土地点は不動橋といわれるところで、階段状の石組があったという。しかし、その個所は、昭和56年度農業用排水路建設において大きく被掘され、調査時にはその痕跡を追求することはできなかった。



第1図　法養寺遺跡位置図

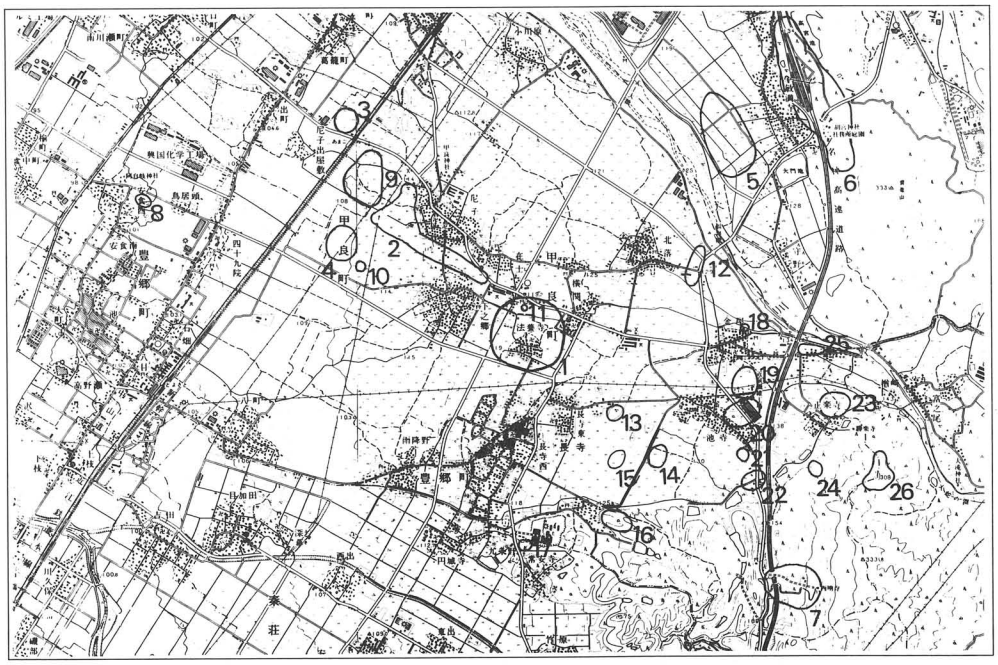
調査は道路予定面積約6,600㎡のうち、試掘調査によって明らかになった約3,000㎡を対象とし、昭和58年4月から9月まで発掘調査を行い、10月から昭和59年3月までを整理期間とした。法養寺遺跡では第2次調査にあたる。

調査は文化財保護課が県土木部道路課より予算（試掘調査300,000円、発掘調査10,350,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。

第１章　位置と環境

法養寺遺跡は滋賀県犬上郡甲良町法養寺地先に所在し、甲良町のほぼ中央部に位置する。当遺跡は現集落法養寺と重複する拡がりをみせ、約20,000㎡の規模をもつ遺跡と考えられている。今回調査の対象地となったところは遺跡の西端部にあたると思われる。標高は約117.5ｍを測り、西方へゆるやかに傾斜する沖積平野である。

昭和57年度の隣接地における調査では、平安時代後半の掘立柱建物５棟と土坑２基、河川跡１条等を検出された。それによると、建物Ａ群は初期荘園制下における農村形態の単位である、家父長制的世帯共同体を残した中世荘園制度の初源的形態とされている。また、調査地の北側から検出された河川跡は、今回の調査からもその延長部が検出されるものと思われた。



１．法養寺遺跡　２．尼子南遺跡　３．長畑遺跡　４．下の郷西遺跡　５．水沼荘跡　６．敏満寺遺跡　７．西明寺遺跡　８．安食西古墳　９．尼子古墳群　10．下の郷古墳群　11．宮後西古墳　12．北落古墳群　13．三博古墳群　14．四ツ塚古墳群　15．横枕古墳群　16．西ヶ丘古墳群　17．二子塚古墳群　18．金屋北古墳　19．金屋南古墳群　20．外輪古墳群　21．堀之内古墳群　22．寺道古墳群　23．正楽寺古墳群　24．狐塚古墳　25．金屋遺跡　26．正楽寺山城跡

第２図　法養寺遺跡位置図および周辺の遺跡（Ｓ＝１/50000）

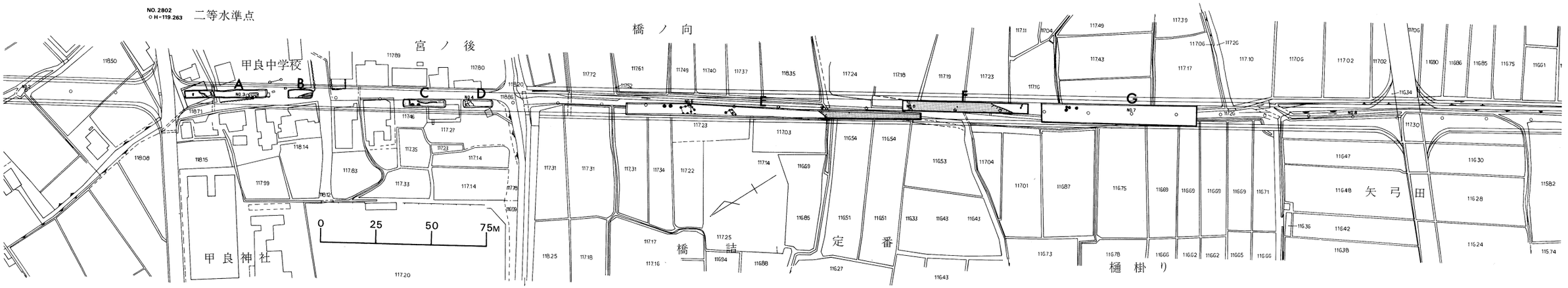
第３図　法養寺遺跡周辺地形測量図

甲良町の遺跡は、金屋遺跡が当遺跡の東方約２kmにあり縄文土器の出土を伝えている。弥生時代の遺跡はまだ確認されておらず、古墳時代になると、当町東方の金屋、正楽寺、九条野にかけて、多くの古墳群を形成する。中でも九条野にある二子塚古墳は直径約60ｍを測る古墳で他より優越した規模をもつ。当該地の北東約 100ｍには宮後西古墳があり、わずかに墳丘の痕跡を残す古墳である。また、当遺跡西方約１kmの水田にも数基の古墳が分布する。

奈良時代以降になると、当遺跡周辺に下之郷遺跡、在士北、尼子南遺跡があり、すべて集落跡と考えられている遺跡である。昭和58年度、当遺跡の北西約２kmに南北方向を基準にもつ掘立柱建物約40棟で構成された長畑遺跡が発見された。この遺跡は、大型の東西棟建物を中心にその東西に南北棟建物を規則正しく配置する構造をもち、西側に倉庫群を形成している。時期は奈良時代中頃から平安時代中期にかけてのもので、大きく３期に分けられるとされている。現在、官衙を兼ねそなえた大豪族の居宅跡と推定され、上記の諸遺跡と性格を異にする遺跡と考えられている。

甲良町は「正倉院文書」でいう甲良郷と尼子郷に相当するとみられ、「和名抄」には犬上郡に安食、甲良、尼子、高宮、田司、沼波、清水、神戸、賓田、青根、駅家の八郷をのせ、そこにも甲良、尼子の名をみる。当地は甲良郷に該当するであろう。

犬上荘関係では、平安時代以降延暦寺、日吉神社、園城寺、東大寺、興福寺等の荘園が多くあった③。甲良荘としては、治暦年間（1065～69）の甲良荘総社甲良神社創記に甲良荘の名がみえる④。甲良町の所々に残る犬上郡条里制地割の畦畔はその名残りであろう。



第4図　トレンチ位置図および地形測量図

第2章　調　　査

1．調査経過

試掘調査および発掘調査の基準割り付けは、道路工事用基準測点を採用した。調査対象となるのはNo.２＋70～No.８＋20の延長約550ｍで、道路幅は12ｍであることから総面積約6,600㎡を測る。

試掘調査は約３ｍ四方のグリットを約50ｍ間隔に設定し、北からNo.１・２・３……15と番を付け遺跡の範囲・性格等を追求した。

No.１グリット　現表土下約1.2ｍの地山層近くから須恵器･土師器・瓦器が出土した。遺構は確認できない。上層は大きく撹乱されている。

No.２・３グリット　数点の土師器片が出土した。遺物包含層は南にいくにしたがって浅くなる。

No.４～６グリット　No.６グリットから土師器片が１点出土するのみである。

No.７・８グリット　地山面は現表土から0.7ｍ位になる。明確な遺構はない。

No.９・10グリット　現表土約0.3ｍから小土坑を各１基づつ検出する。

No.11～13グリット　現表土約0.2ｍの水田耕作土直下から数個の柱穴を検出する。

No.14・15グリット　遺構面は大きく被掘されている。

上記の結果、出土遺物は奈良時代から中世のもので、グリットが南へ行くにしたがい遺物の時期が遡る傾向にある。柱穴を検出したNo.12・13の土層は隣接地の遺構面と同質であり、柱穴は集落に伴うものとみられた。

このことから、発掘調査は道路用測点No.２＋70～No.７＋60を対象とした。ただ、No.２＋70～No.４＋25間は道路拡幅工事であり、現在も旧道路を利用していることから、調査は新たに拡幅される部分にトレンチを４本設定し、遺構の拡がりによってトレンチを拡張することにした。Ａ・Ｂトレンチは甲良神社境内部分にあたり、Ｃ・Ｄトレンチは宅地・水田跡にあたる。

No.４＋40～No.７＋70は全面調査することにしたが、道路の側溝、農業用水路は調査より先行して工事がなされ、さらに、旧道路にそって旧用水路があり、また、旧道路

には水道管が現表土下1.5～2.0ｍに埋設されていることから、ともに遺構面は被掘されていた。このことから、被掘部分は調査対象外とした。

２．調査日誌（抄）

昭和57年

７月16日　本日から試掘調査を開始する。試掘用グリットは北からNo.１・２・３と番号をつけ、15個設定する。No.１～４を掘削。平安時代から中世の遺物の出土をみる。

７月17日　No.５～９を掘削。No.９より土坑状遺構を検出。

７月19日　No.10～15を掘削。No.10・12・13から数個の柱穴を検出。No.14・15には遺構は検出されない。

７月20～21日　グリットの測量実測。グリット埋め戻し作業。

昭和58年

４月25日～30日　地形測量等作業。

５月９～14日　プレハブ設営および調査準備作業。

５月17～18日　調査用割り付け作業。

５月19日　Ａ～Ｄトレンチ設定。各トレンチの周囲に安全柵設置。Ａトレンチ掘削。上層の撹乱著しい。地形は北側へ大きく傾斜し、表土下約1.3ｍから土師器・須恵器出土。

５月20・21日　Ｂトレンチ掘削。南北にのびる溝検出。大部分は水道工事で被掘される。

５月23・24日　Ｃトレンチ掘削。約1.8ｍ下層で遺構面検出。東側に土坑状落ち込みあり、擂り鉢、軒平瓦等出土。

５月25・26日　Ｄトレンチ掘削。表土下約1.8ｍから井戸状石組検出。トレンチの南側⅔は大

第５図　発掘調査風景（Ｃトレンチ掘削状況）

きく被掘され遺構面は消失。

5月27～31日　各トレンチ遺構検出作業。トレンチ断面実測。

6月1日　Cトレンチから礎石立建物検出。

6月3～8日　各トレンチ平面実測および写真撮影。

6月13～30日　No.4～No.7地点表土除去作業。

7月6～11日　No.4＋75～No.5＋15遺構検出作業。No.4＋90付近から柱穴、土坑等を検出。

7月12～14日　No.5＋60から南側遺構検出作業。河川跡検出。須恵器片の出土が多い。

7月19～24日　河川跡は表土下約2mまで落ち込み、No.5＋65～90にかけて遺物を多量に包含する。河川跡の幅は約90mを測る。

7月25日　No.6＋50付近にて柱穴数個検出する。

7月26・27日　河川跡断面実測。

7月28～30日　No.6＋60から南側の遺構検出作業。

8月1～9日　遺構掘り下げ作業と写真撮影。

8月10～12日　平面実測用割り付け作業と平面実測。

8月19～30日　平面・断面実測作業。

9月1～14日　No.4以降遺構平板実測作業。

9月16日　本日から整理作業に入る。

第3章　遺　　構

今回の調査では柱穴、礎石、井戸状遺構、土坑、河川跡を検出した。掘立柱建物はトレンチおよび調査対象地外にのびるため全貌を追求することはできなかった。

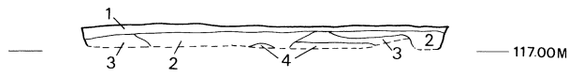
Aトレンチ　No.2＋71～No.3＋9に設定した長さ38m、幅3.5mのトレンチである。甲良神社の社務所、手洗場があったところで、建物基礎や漆喰で固められた井戸などを上層で検出した。地山面は北側へ大きく傾斜し、最深部で約1.3mを測る。地山直上から土師器、須恵器、陶器片が出土する。遺物に伴う遺構は検出されない。ただ、トレンチ北端近くの表土下0.7mから柱穴を2基検出した。

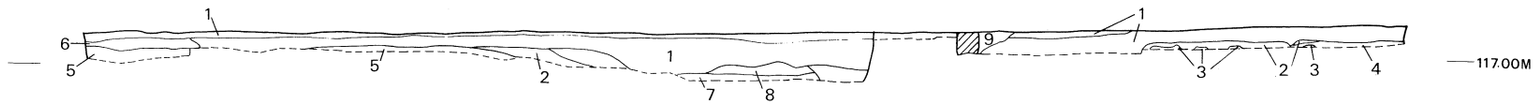
Bトレンチ　Aトレンチの南約10m（No.3＋19～30）に設定した長さ11m、幅3.5mのトレンチである。かって甲良神社の塀のあったところにあたる。表土下約0.6mの暗黄褐色砂質土層から南北方向にのびる溝を検出した。しかし、溝と重複して水道管が埋設されており、溝の東壁部分のみ遺存する。そこから土師器の小皿が1点出土した。溝は神社の塀の痕跡と考えられる。

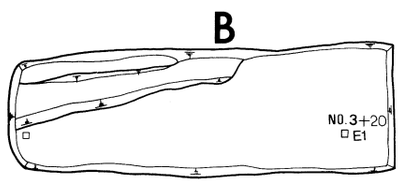
Cトレンチ　No.3＋70～90に設けた長さ20m、幅3.5mのトレンチである。表土下約1.8mのトレンチ北西部から礎石立建物ＳＢ１を検出した。検出した礎石は3石で、心々距離は北側2.3m、南側3.0mを測る。方位はほぼ南北方向に並び、建物の東側梁行に相当するものと思われる。使用石材は約0.2mの平坦なもので、直径0.5～1.1mの浅い円形掘り込みの中央部に設置されている。建物の北側には直径1.4mの拡がりをもつ小礫の粉砕跡ＳＸ１がある。

トレンチの東側は、楕円形の浅い土坑状落ち込みＳＫ１０１があり、陶器片や軒平丸が出土する。

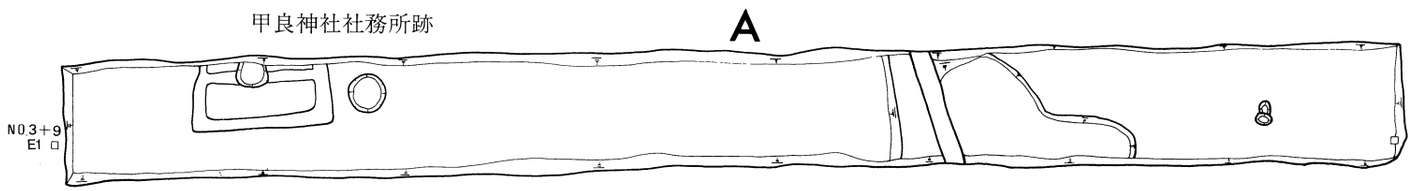
Dトレンチ　Cトレンチの南側7mのNo.3＋97～No.4＋10に設定した長さ13m、幅3.5mのトレンチである。トレンチの南側2/3は大きく被掘され、遺構面はない。トレンチ北端隅の表土下約1.8mから円形の石組を検出した。直径は約0.7mを測り、2段のみ残る。石材は0.1～0.2mの円礫を使用し、その周りにやや大きな石を配する。底部は地山を丸く掘り込んだままで、木枠等の痕跡は認められない。形態から井戸と考えられＳＥ１とした。ＳＥ１からは遺物は出土しないが、その周囲から土師器片が出土する。

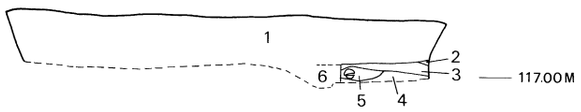


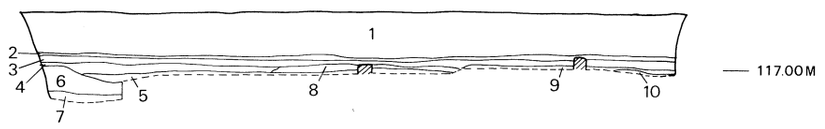


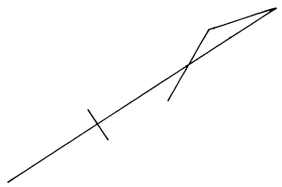


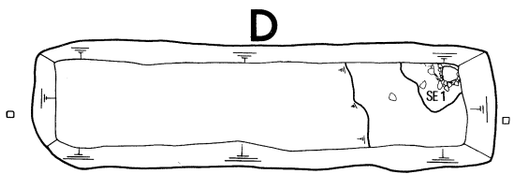
甲良神社社務所跡

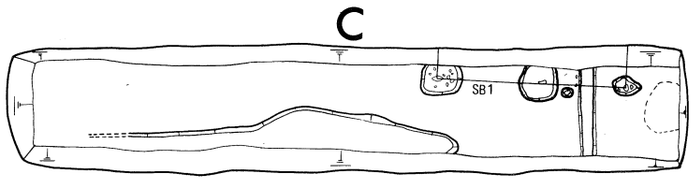






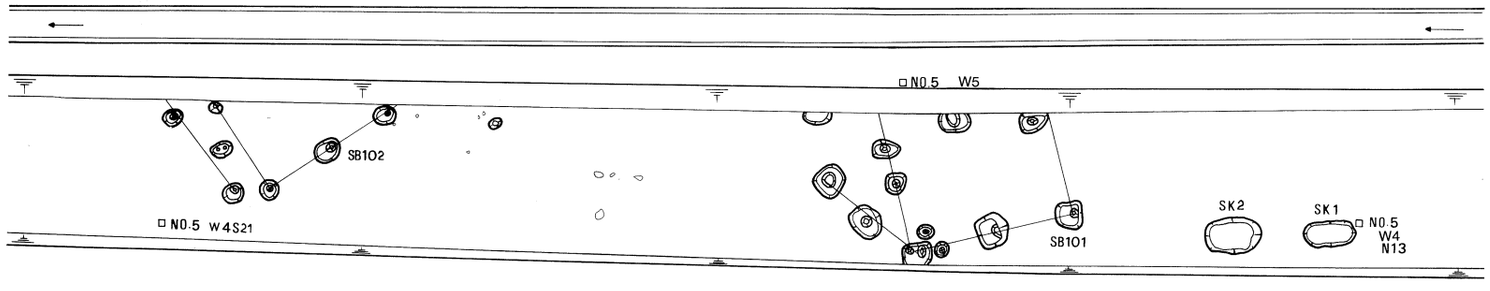


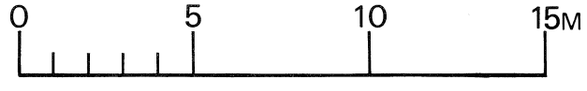




SK101

NO.4+85～NO.5+25





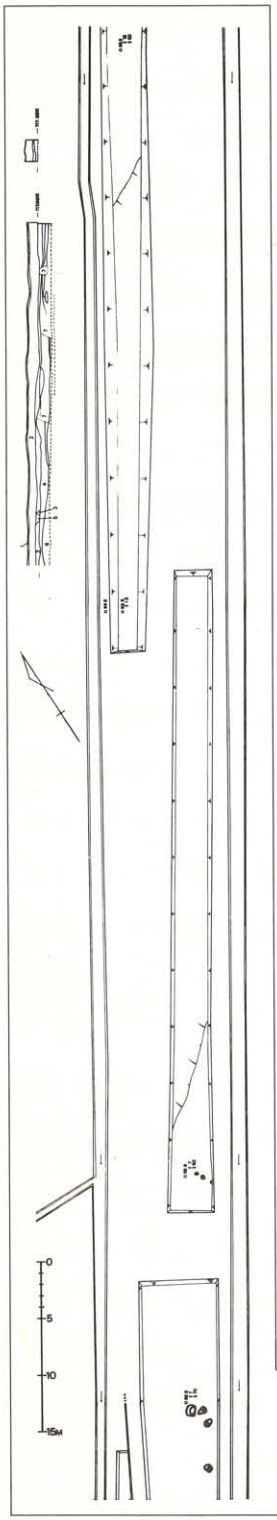
A
1 盛　土
2 黄褐色砂質土
3 淡灰色粘質土
4 淡灰色砂質土（1 cm礫）
5 淡灰色砂利層（0.5～20cm礫）
6 淡灰褐色砂質土（1 ～ 5 cm礫）
7 灰青色粘質土（1 cm礫）
8 灰褐色砂質土（1 ～ 5 cm礫）
9 撹　乱

B
1 盛　土
2 撹　乱
3 灰褐色砂質土（1 ～ 5 cm礫）
4 暗黄褐色砂質土

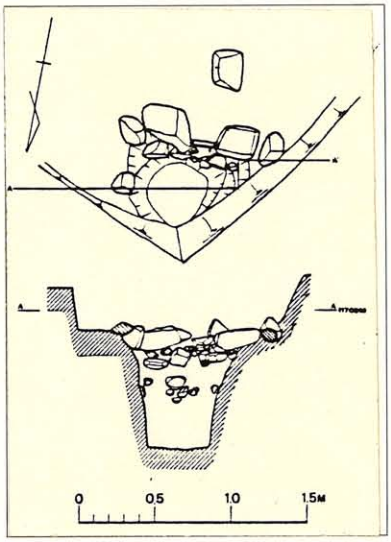
C
1 盛　土
2 灰青色粘質土
3 灰褐色砂質土（1 ～ 2 cm礫）
4 灰色礫層（2 ～10cm礫）
5 灰黄色粘質土
6 淡灰色砂礫層（1 cm礫）
7 淡黄褐色砂礫層（1 ～10cm礫）
8 灰褐色砂礫層（1 cm礫）
9 淡灰褐色砂質土（1 ～ 2 cm礫）
10 黄褐色砂質土

D
1 盛　土
2 灰青色粘質土
3 灰褐色砂質土（1 ～ 2 cm礫）
4 淡灰褐色砂質土（1 ～ 2 cm礫）
5 淡灰色礫層（1 ～10cm礫）
6 撹　乱

第6図　A～Dトレンチ No.4 +85～No.5 +25 遺構平面実測図



No.4 ＋75～No.5 ＋25　柱穴、土坑等を検出した。柱穴は掘立柱建物のものとみられるが、建物として推定されるのは２棟である。ＳＢ１０１とした建物は桁行２間以上（３m以上)、梁行２間(4.8m）の規模をもち東西棟建物になると思われる。柱穴の掘形は平面隅丸方形を呈し、１辺0.5～1.0mあり、柱痕は直径約0.2mの平面円形である。



第７図　Ｄトレンチ ＳＥ１実測図

ＳＢ１０２はＳＢ１０１の南側約15mにあり南北棟建物になるとみられる。桁行２間以上(3.9m以上)、梁行１間以上(2.8m以上）を測り、柱間は桁行で南から2.1m、1.8mである。柱穴の掘形は平面円形を呈し直径0.3～0.6m、柱痕は0.2mである。この建物の南側には柵とみられる柱穴が２基ある。心々距離は2.7mを測る。

土坑はNo.4 ＋85付近から２基南北に並んで検出された。ともに平面楕円形を呈し、埋土は柱穴と異なる灰褐色粘土である。北側のＳＫ１は長辺1.4m、短辺0.7m、ＳＫ２は長辺1.5m、短辺1.1mを測り、底部は丸く舟底状を呈し、最深部で0.3mを測る。出土遺物はない。

No.5 ＋50～No.6 ＋50　河川路ＳＲ１とＳＲ１の南側から柱穴を検出した。ＳＲ１は北北東から南南西にのびる幅約90m

第８図　河川跡遺構平面実測図

１．表土(整地層：褐色砂礫層）　２．黄褐色破礫層
３．灰褐色土　４．淡灰色粘質土　５．淡黄褐色砂礫層　６．暗灰色粘質土　７．撹乱

のもので、北側が深く、南側はゆるやかな傾斜面をもつ。深さは最深部で約1.5ｍを測り、最も深いNo.５＋75～85の10ｍから大量の須恵器と土師器が出土する。埋土は青灰色粘土と砂層がサンドイッチ状に推積する。この河川は前年度調査を行った隣接地でその延長部分を検出している⑤。

柱穴はNo.６＋50付近で３基検出したもので、一直線に並ぶ。いずれも直径0.2～0.3ｍの柱穴である。

No.６＋50～No.７　No.６＋70～77から柱穴を４基検出した。柱穴は水田耕作土直下から検出した。他に柱穴は認められず建物としての構造は明らかではない。

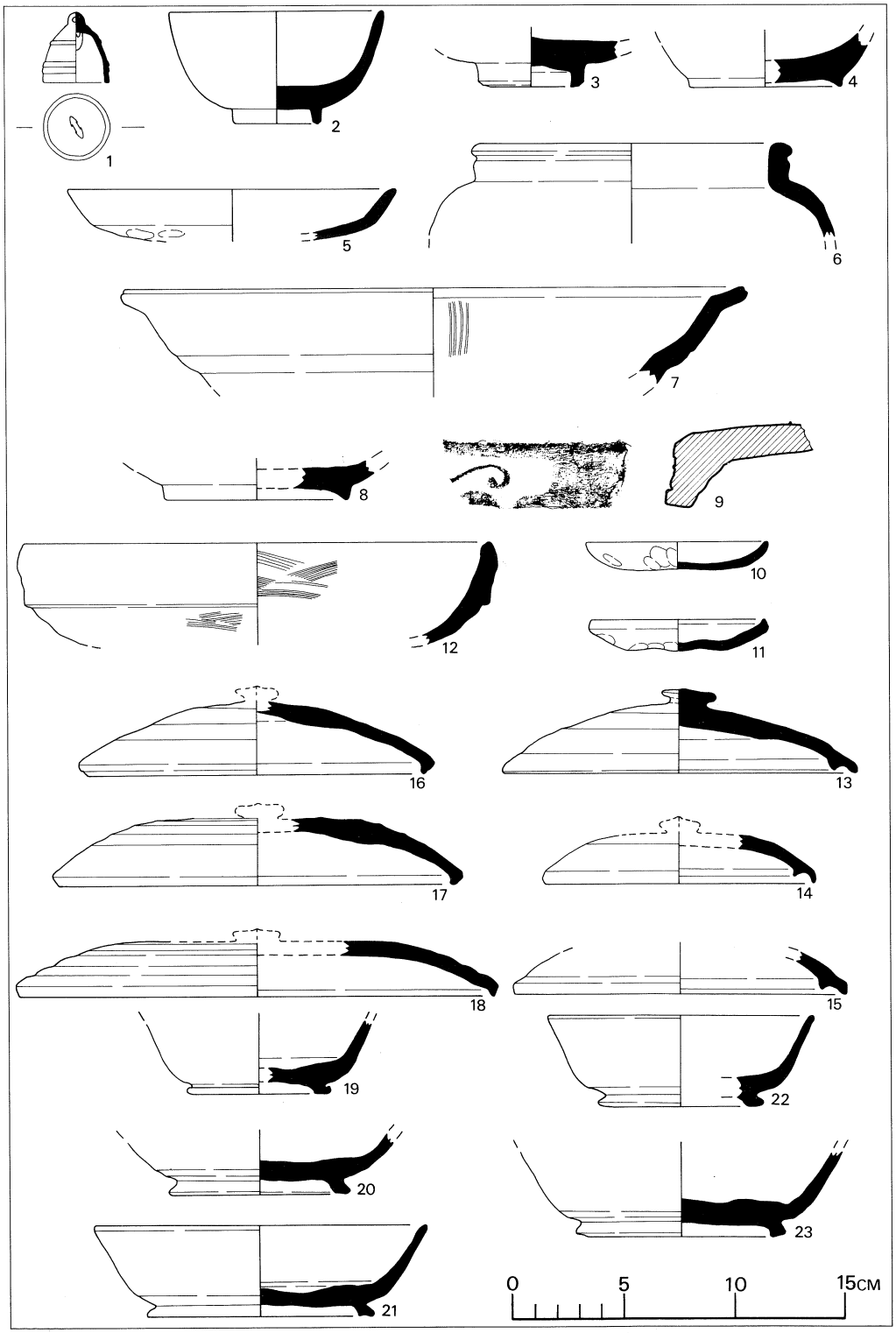
第4章　遺　　物　（第9～11図、図版八・九）

今回の調査により出土した遺物は多種多様でかなりの時期差がある。これは、現存する甲良神社の境内を含めて調査したことに起因する。ここでは、各トレンチごとに記述し、その中でも遺構に伴って検出した遺物を主にとりあげる。遺物の保存状況は概して良好とはいえず、細片が多い。

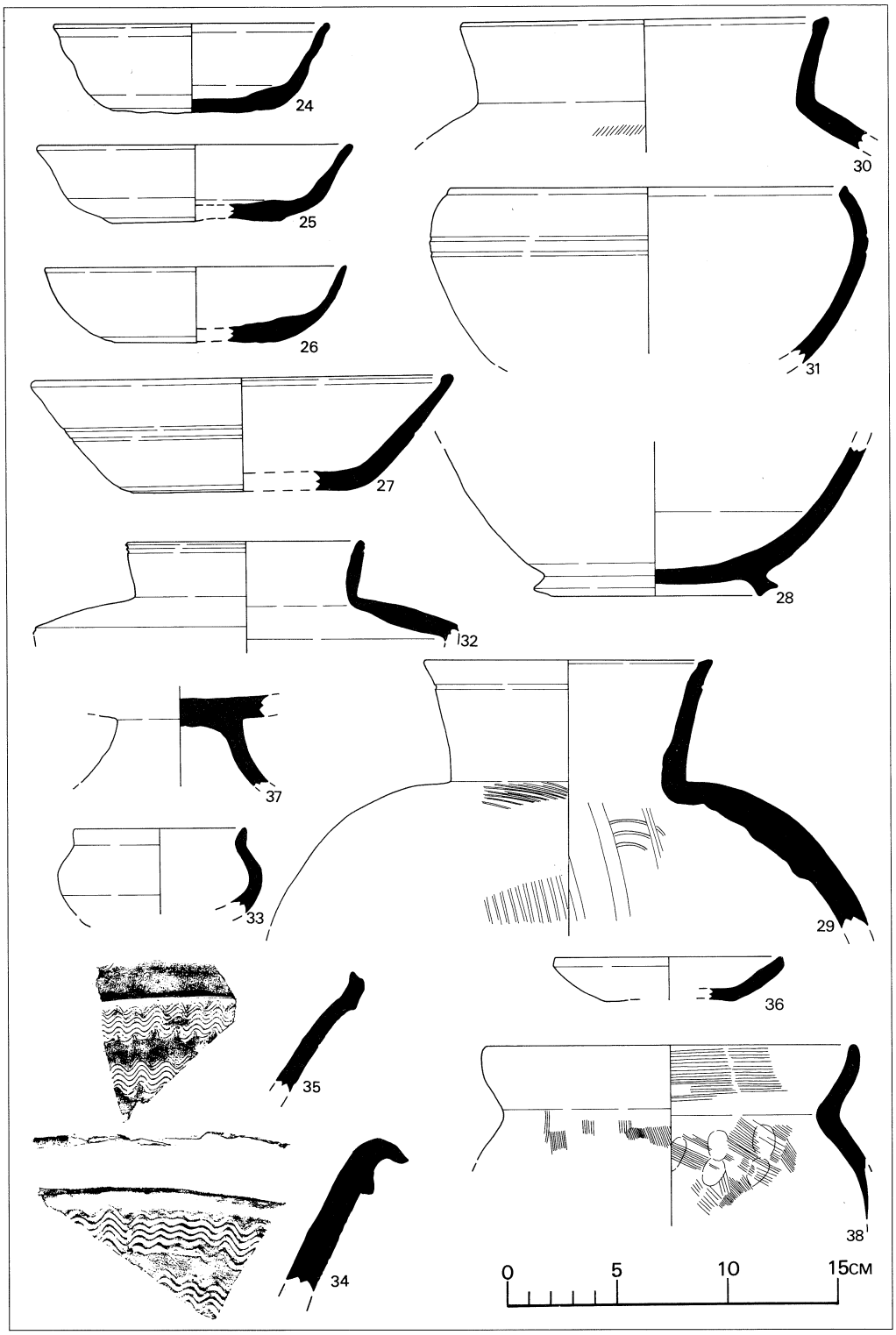
Aトレンチ　銅製鈴（1）、染付埦（2）、青磁皿（3）、土師器皿（10・11）、瓦器埦（46）がある。1・2は甲良神社旧建物基礎付近から出土した。1は器高3.2cm、口径3.0cmを測り、内側天井部に舌をつる突起部がある。外面下位に2条、上位に1条の凸線をめぐらす。2は口径9.6cm、器高5.1cmの埦で外面および底部外面に施こされた群青色はにぶい。いわゆる湖東焼の茶埦の系統かと思われる。10・11は小皿で10は口径8.2cm、器高1.3cm、11は復元口径7.8cm、器高1.4cmを測る。10は口縁部を1段ナデし、他もていねいにナデ調整する。11は口縁部をわずかにつまみ上げる。内面には黒炭が付着することから燈明皿として使用していたのであろう。胎土は10は良く11に砂粒を多く含む。焼成は11がやや軟質で淡褐色を呈する。10は良く白褐色である。46は試掘調査時に出土したものである。口径10.2cm、器高3.0cmを測り、器壁は薄い。内面のみこみに放射状暗文を、口縁部には横方向の暗文を施こす。胎土は良く、焼成はやや軟質で暗灰色を呈する。

Bトレンチ　山茶埦（4）、土師器皿（5）、短頸壺（6）がある。4は断面三角形の短い高台を付けるもので、貼り付け調整は荒い。高台径6.7cmを測る。胎土に微砂粒を含み、焼成は良く淡灰褐色を呈する。5は溝内から出土したものである。復元口径14.6cmの中皿で、口縁部を1段ナデし、底部外面もかるくなでる。全体にていねいな調整である。胎土・焼成とも良く白褐色を呈する。6は口頸部が立ち上るもので、肩はあまり張らない。胎土は良く砂粒を少量含む。焼成は堅緻で明茶褐色を呈する。瀬戸製品と思われる。

Cトレンチ　摺鉢（7）、山茶埦（8）、軒平瓦（9）がある。7は荒い摺目を部分的にもつもので、口縁部はよく外反する。復元口径は15.9cmである。胎土に砂粒と1～3㎜の石英を含む。焼成は軟質で白褐色を呈する。8は断面三角形の高台を持ち、口



第９図　Ａ～Ｃトレンチ，No.３～No.５　出土遺物実測図



第10図　No.5 ・No.5 ＋50～No.6 付近 出土遺物実測図

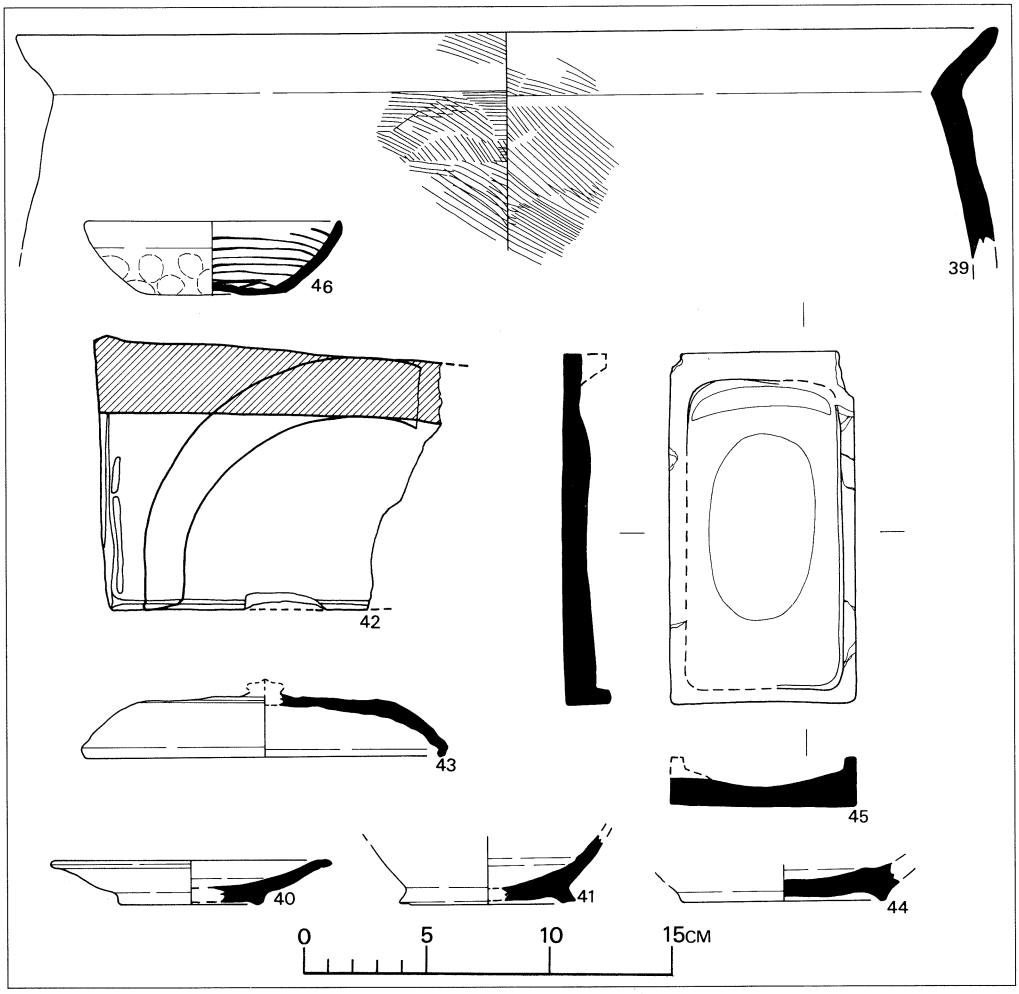
縁部内面を施釉する。底部外面に糸切り痕を残す。胎土に砂粒を少し含み、黒斑が全面にみられる。白灰褐色を呈する。9は唐草文軒平瓦である。瓦当と平瓦の接続に補強粘土を貼り、全体をていねいにナデ調整する。胎土・焼成とも良く、淡灰褐色を呈する。

No.5付近　土師器鉢（12）がある。ＳＢ101の柱穴から出土した。口縁部は内弯しながらのび端部を肥厚さす。内外面に横方向のハケ目調整を施こす。胎土に微砂粒を含み、焼成はやや軟質で淡褐色を呈する。

No.5＋50～No.6　須恵器杯蓋（13～18）・杯身（19～27）・壺（28・30・32・33）・横瓶（29）・鉢（31）・甕（34・35）、土師器皿（36）・高杯（37）・甕（38・39）、灰釉陶器皿（40）・緑釉陶器皿（41）、瓦丸瓦（42）がある。これらはＳＲ1から出土したもので、他にも多量の土器片が出土した。

須恵器杯蓋13～15は口縁部内面にかえりをもつ器で、口縁端部より尖出するものはない。13は口径15.8cm、器高3.8cmを測り、擬宝珠形のつまみを付け、天井部約½をヘラ削りする。14は13より小型品で口径12.4cmあり、かえりの端部は尖りぎみである。13・14の胎土に砂粒を含む。焼成はいずれも良く、13・14は白灰色、15は暗灰色を呈する。16～18は口縁端部をわずかに垂下さすものである。天井は16のみ高く、他は平坦となる。いずれも天井の⅔をヘラ削りする。口径は16は16cm、17は18.4cm、18は21.4cmを測る。胎土はともに1～3㎜の砂粒を含み、焼成は良く色調は16・18は白灰色、17は青灰色を呈する。

杯身は高台付19～23と平底24～27とがある。高台付杯身の高台はいずれも外方へふんばり、20・21・23は底部から体部への境界屈曲部にヘラ削りを施こす。21の底部外面はヘラ切り後ていねいになでている。口径は21は14.9cm、22は11.8cm、器高は21・22とも4.1cmである。胎土はいずれも砂粒を少量含み、焼成は良く、色調は19・21・23は青灰色、他は白灰色を呈する。平底の杯身のうち24・25の口縁部は外反し、26は内弯する。27は直線的にのび、端部を内側へ肥厚さす。底部外面は27のみヘラ削り調整し、他は未調整である。27の体部中央部に2条の凹線がめぐる。口径は24は12.3cm、25は14.1cm、26は13.6cm、27は18.9cmあり、器高は24は4.0cm、25・26は3.5cm、27は5.1cmを測る。胎土はいずれも1㎜前後の砂粒を含み、焼成は良く、色調は24・25は青灰色、26・27は白灰色を呈する。



第11図　Aトレンチ・No.5～No.7付近出土遺物実測図

壺22は丸底の底部に外方へふんばる高台を付けたものである。底部外面はヘラ切り後なので、体部の下位にヘラ削りを施こす。内面は横ナデ後再度不定方向になでる。胎土・焼成は良く、灰白色を呈する。30・31は口縁部のみ遺存するもので、31の口縁端部は内外へ肥厚さす。32は肩のよく張り出す体部に、短い口頸部をつけた器で、口縁端部外面に2条、肩部に1条の凹線をめぐらす。色調は暗灰色を呈し、胎土・焼成とも良い。33は丸底の体部に短い口頸部をつけたもので、体部下位をヘラ削りする。復元口径は7.8cmである。胎土は精良、焼成は良く暗灰色を呈する。

鉢31はいわゆる鉄鉢形を呈するもので、口縁端部にゆるい面をもつ。体部最大径部分に2条の凹線をめぐらす。遺存部内外面ともていねいに横ナデ調整を施こす。胎土

に砂粒を少し含み、焼成はややわらかく灰白色を呈する。

甕34は大甕の口縁部で、端部をよく外反させる。端部直下に断面三角形の凸帯をめぐらせ、その下位に２組以上の波状文を施こす。35は口縁端部を肥厚させ、さらに上方へつまみ上げるもので、外面に２組以上の波状文を施こす。胎土・焼成はともに良く、色調は34は淡暗灰色、35は淡灰色を呈する。

土師器小皿36は口縁部をなで、端部をさらにつまみ上げるもので、復元口径10.2cmを測る。胎土・焼成は良く乳褐色を呈する。高杯37は脚部上位のみ遺存する。脚部の面取りはない。胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良く、乳白褐色を呈する。甕37は丸味のある体部と内弯する口縁部をもつものである。口縁外面は縦方向にハケ目した後ナデ調整する。内面は横方向のハケ目調整を施こす。体部は内外面とも細いハケ目調整を密に施こす。内外面にススが多く付着する。復元口径は16.6cmで、胎土に２mm前後の砂粒を多く含む。焼成は良く暗乳褐色を呈する。35はく字状に屈曲する口頸部をもち端部にゆるい面をもつ。口縁部外面以外ハケ目調整する。復元口径39.6cmを測る。胎土に１～３mmの砂粒を多く含み、焼成はややわらかく、淡褐色を呈する。

灰釉陶器皿40は外反する口縁部の外面に段をもち、底部外周に丸くて短い高台をつける。復元口径は11.1cm、器高1.8cmである。底部外面に糸切り痕を残す。内面と外面端部に光沢のある青白色の施釉をする。おそらく漬け掛けであろう。

緑釉陶器皿41は末施釉の緑釉陶器である。内面の体部と底部との境界部に段をもち、断面台形の高台をつける。内面底部に重ね焼きの痕跡がある。復元高台径は7.0cmである。胎土は密で、焼成はやや軟質、暗灰色を呈する。

丸瓦42は玉縁のつかないもので、広端部のみ遺存する。凸面はていねいにヘラ削りし、内面には１cm四方約９本の布目痕を残す。胎土は良い。砂粒の含有量は少ない。焼成は軟質で白っぽい乳褐色を呈する。

No. 7 付近　須恵器杯蓋(43)、山茶垸(44)、硯(45)がある。44は口縁部を垂下させるもので、天井部約½をヘラ削りする。復元口径16.8mmを測る。胎土・焼成は良く、白灰色を呈する。44は断面三角形の短い高台を付ける器で、底部外面に糸切り痕を残す。内面に重ね焼きの痕跡をみる。胎土は粗く細砂を少量含む。焼成は良く灰白色を呈する。

45の硯は石製品のいわゆる長方硯である。現在も使用している形態で、一方を陸とし端部に海をもつ。陸は傾斜しない。ただ、陸はよく使用されたとみえ、中央部は約

2㎜くぼむ。長辺14.2cm、短辺7.5cm、厚さ1.5cm、縁高0.6cmを測る。色調は淡黒色を呈し、湖西の高島産とみられる。

ここで今回出土した遺物について若干の検討を加えてみよう。

Aトレンチ、SR8201出土の土師器小皿は法量、口縁部の形態から前年度調査のSB8201、8202出土の小皿に類似性を求めることができ⑥、愛知郡市遺跡出土の土師器にも似る⑦。このことから、平安時代後葉の12世紀中頃に比定でき、青磁3もほぼ同時期と考えられる。

山茶埦4・8・44は低い高台を付けることから瀬戸窯編年のII段階4型式⑧かそれより若干時代の降るものとみられ、12世紀中頃から後期頃に比定されよう。この時期の遺物としては、Cトレンチ出土の軒平瓦がある。

灰釉陶器40は底部未調整で、施釉は漬け掛け法を採用していることから折戸53号窯期の新しいタイプに似る⑨。緑釉陶器41はいわゆる近江産の器で、水口町春日山の神古窯出土品に極似する⑩。山の神古窯の製品であろう。

つぎに、河川跡から出土した須恵器の中で、杯蓋13～18は口縁端部にかえりをもち7世紀第3四半期もしくは第4四半期に一部含まれるものである。この形武の土器は秦荘町大間寺遺跡から出土し⑪、近くでは秦荘町高坪古窯からこれより一形式古いかえりをもつ杯蓋が出土している⑫。16～18はかえりをもたず、奈良時代前期に比定され、平城宮II～IIIの特徴を有し、16のみ平城宮Iに相当するであろう⑬。杯身は高台に古い形態を残し、平底の杯身も底部に丸味をもち、平城宮IからIIIの特徴を呈する。しかし、かえりの杯蓋に併行する杯身については、底部の形態のみで判断するのに躊躇する。

丸瓦42は玉縁をつけず、大型の丸瓦であることから、比較的古い形態であることがわかる。伴出遺物から奈良時代前期に比定できるが、かえりをもつ杯蓋の時期まで遡る可能性もある。

第5章　ま　と　め

今回の調査は道路建設に伴うものであり調査面積に制約があった。また、一部に調査より工事の先行したところや後世の撹乱をうけたところなどもあり、遺構の遺存度は決して良い状態ではなかった。その中で、甲良神社旧境内から出土した平安時代から中世の遺物は甲良神社の動向を明らかにするものとして注目されよう。

甲良神社は第1章で述べたように治暦年間頃には創建されていたとみられるが、「神社由緒記」によると、元亀・天正の兵火でことごとく灰燼に帰したことを伝えており詳らかではない。しかし、今回出土した遺物の中に11世紀のものが含まれていたことは、甲良神社の創建期をわずかながら明示したものといえる。また、Cトレンチ検出の礎石立建物やDトレンチの井戸状遺構は甲良神社の門前にあった建物やその施設と考えられる。

No.5＋80を中心に検出した河川跡は出土遺物から7世紀第Ⅲ四半期から中世にかけて存在した河川とみられ、河川跡の北側には小字橋ノ向や橋詰の名をみる。河川のあったことを物語っている小字である。なお、慶長年間に犬上川が大洪水をおこし、それを避けて法養寺は全村あげて約三丁南東の現在地に移住したことを伝えている。おそらくこの時河川は埋まったものと思われる。

なお、河川跡から出土した遺物の中に奈良時代前期の丸瓦が含まれており、寺院の存在を示唆するものとして注目される。当地は大字法養寺とよび、下ノ郷にかけて小字に番城寺、堂前、舞台、宮ノ後、北寺側、南寺側、堂前、金堂口、金堂水、経蔵等の寺院に関連する名をみる。また、寺院を裏づける資料として、甲良神社に絹本着色釈伽三尊画像（室町初期）を蔵し、その裏面に承応二年（1653）の墨書銘があり、法養寺御宮御本尊他とある。ここに法養寺という寺院名をみるが、所在地は詳らかではない。

現在、甲良町からは寺院跡は報告されていない。しかし、昭和56年度から始められた甲良町のほ場整備事業は約10年をかけて行われる計画であることから、その事前調査によって寺院の存在も明らかになると思われる。

註

① 葛野泰樹「犬上郡甲良町法養寺遺跡」（『県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅹ－1　滋

賀県教育委員会　（財）滋賀県文化財保護協会　昭和58年）

② 池野　保　成瀬弘明『滋賀県指定有形文化財甲良神社本殿修理工事報告書』（滋賀県教育委員会　昭和57年）

③ 竹内理三他編「25　滋賀県」（『角川日本地名大辞典』角川書店　昭和54年）

④ 前掲書②

⑤ 前掲書①　ＳＲ８２０１がこれに相当する。

⑥ 前掲書①

⑦ 葛野泰樹・徳網克己『市遺跡発掘調査概要』Ⅰ（愛知川町教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会　昭和58年）

⑧ 藤沢良祐・宮石宗弘『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅱ（瀬戸市暦史民俗資料館　昭和58年）

⑨ 藤沢良祐・宮石宗弘『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ（瀬戸市歴史民俗資料館　昭和57年）

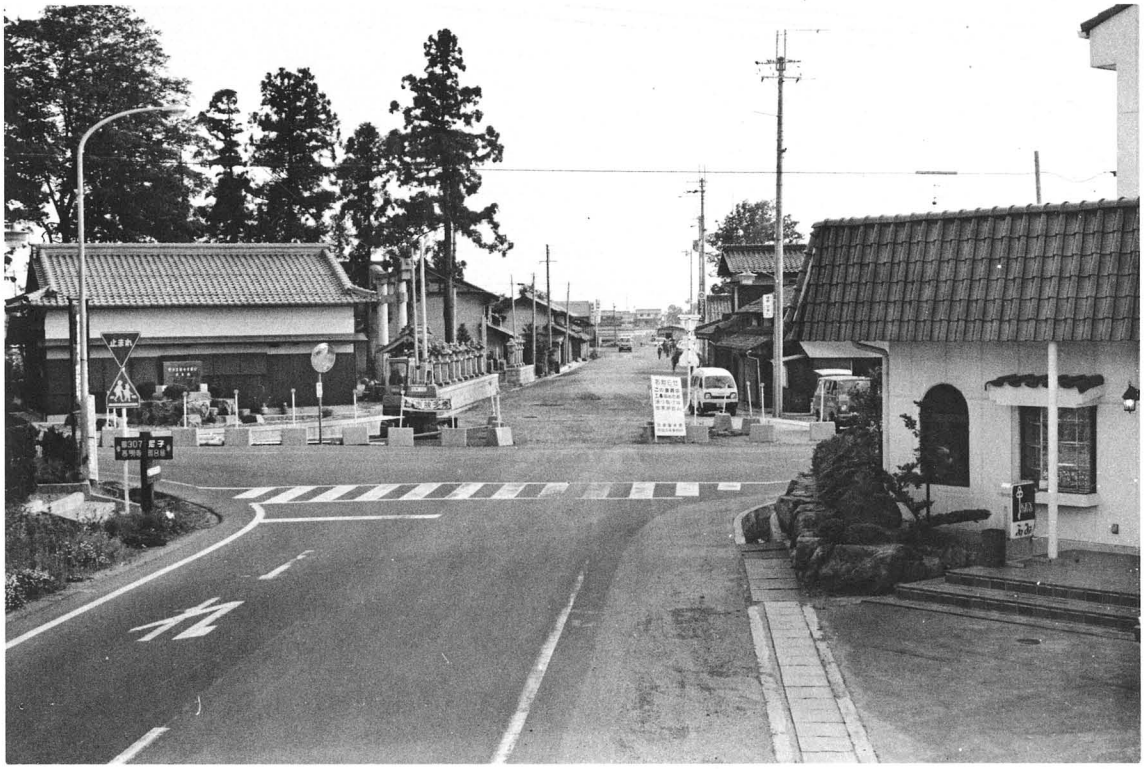
⑩ 山口利彦・丸山竜平「甲賀郡水口町春日山の神古窯跡調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度　滋賀県教育委員会　昭和50年）

⑪ 葛野泰樹・山中仁志『大間寺遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会　（財）滋賀県文化財保護協会　昭和57年）

⑫ 近藤　滋・松沢　修「愛知郡泰荘町高坪古窯跡調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度　滋賀県教育委員会　昭和52年）

⑬ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ（昭和51年）

図　　版



法養寺遺跡調査地区遠景（北から）

法養寺遺跡調査地区遠景（南から）

試　掘　調　査　用　グ　リ　ッ　ト　No.8

試　掘　調　査　用　グ　リ　ッ　ト　No.12

図版三

Aトレンチ（南から）

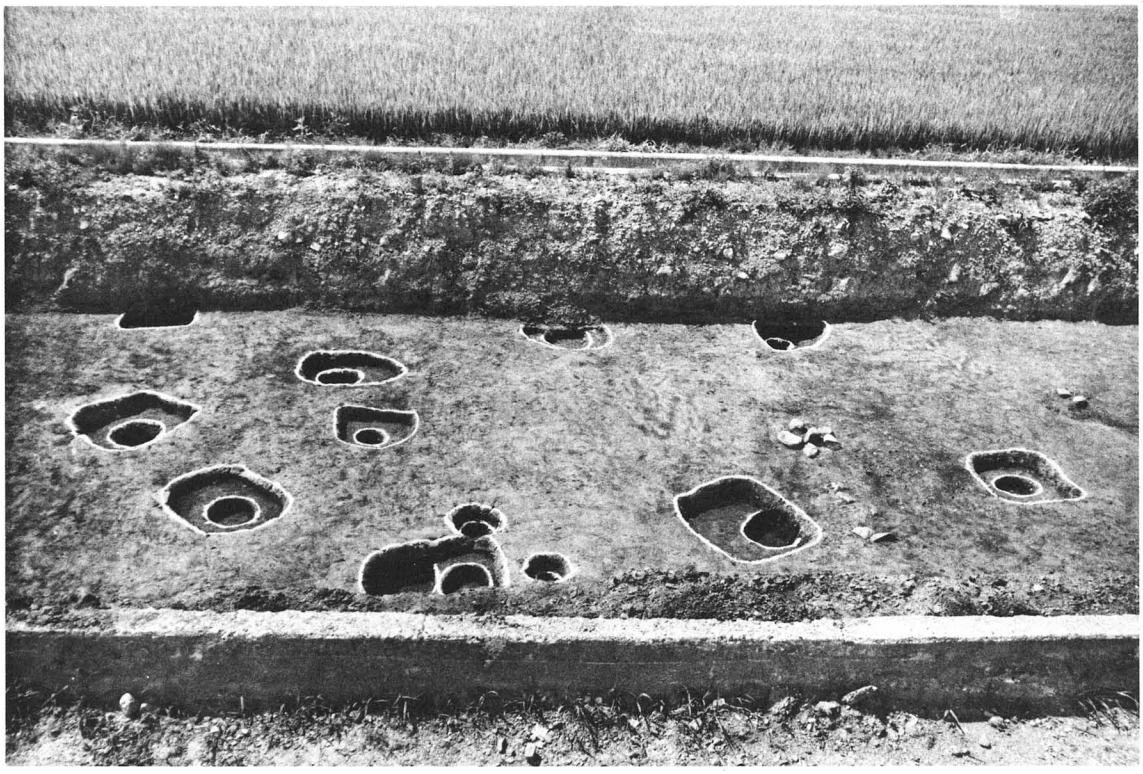
Bトレンチ（南から）

図版四

Cトレンチ（南から）

Dトレンチ（南から）

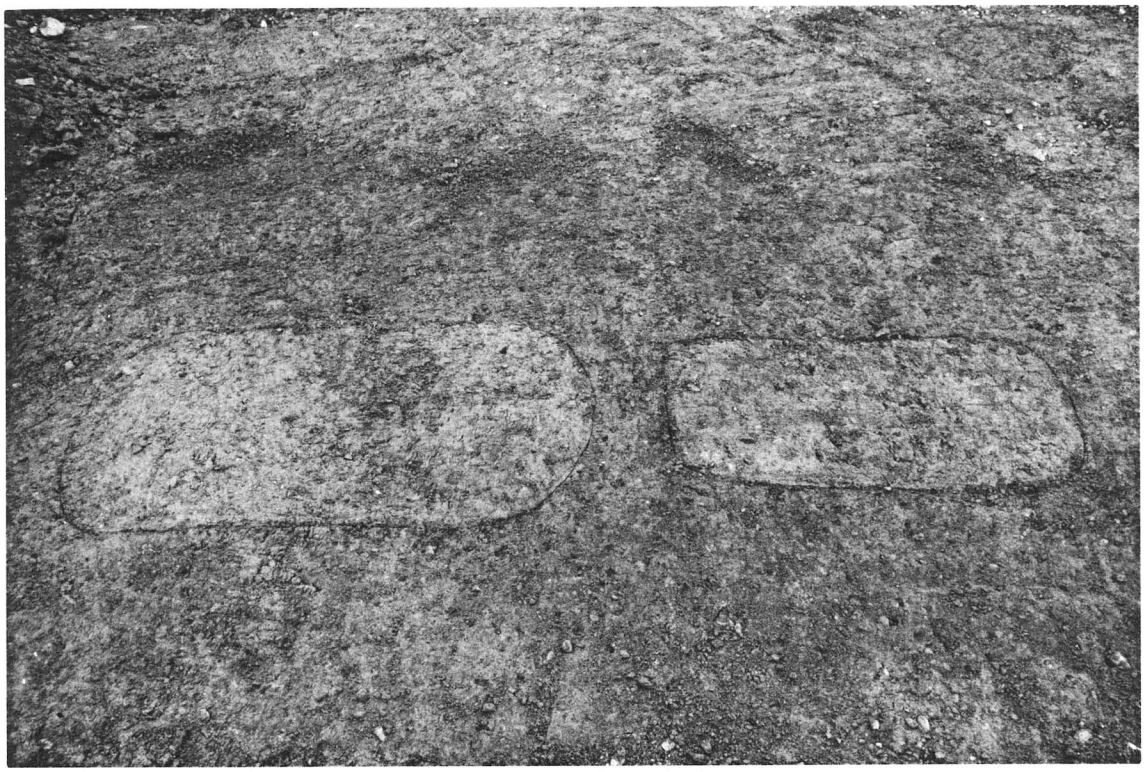
Ｄ　トレンチ井戸跡　ＳＥ１



ＳＢ１０１（東から）

ＳＢ１０２（南から）

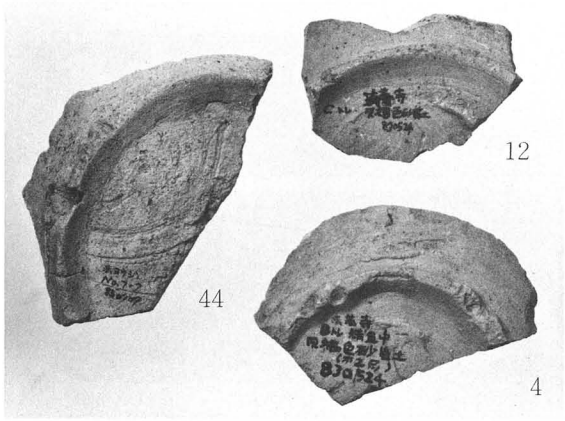
No.６＋50～No.７（北から）

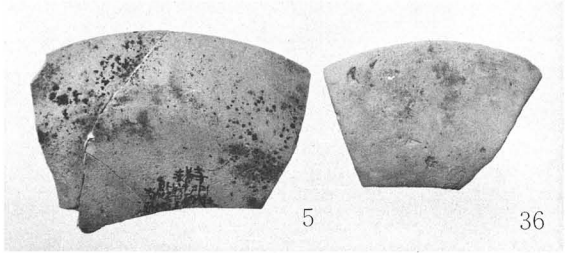


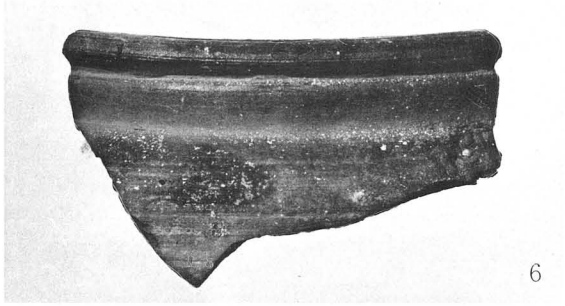
ＳＫ１・２（東から）

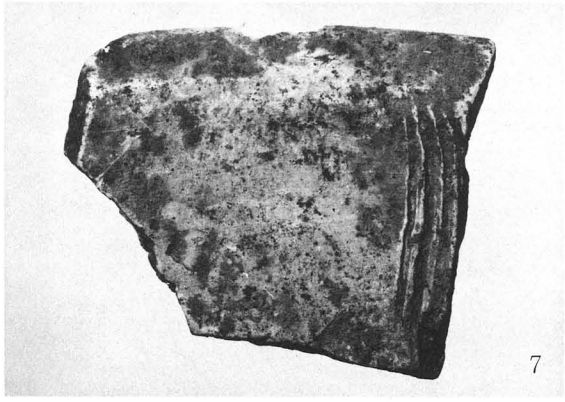
ＳＲ１（南から）

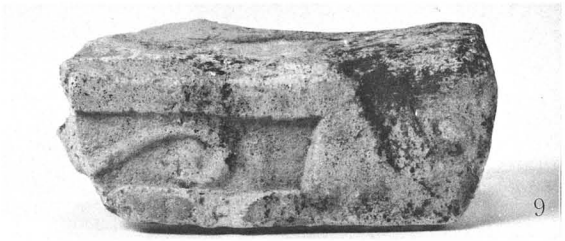
3

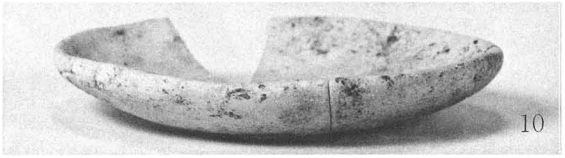

12
44
4


5
36


6


7

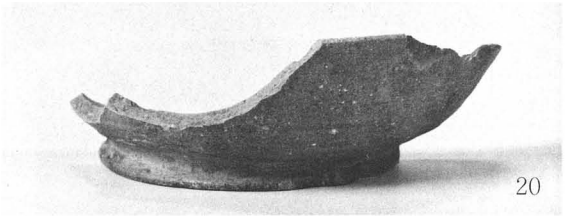

9


10

13

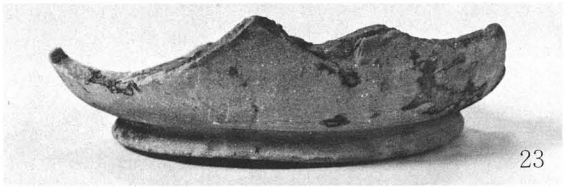
17

19

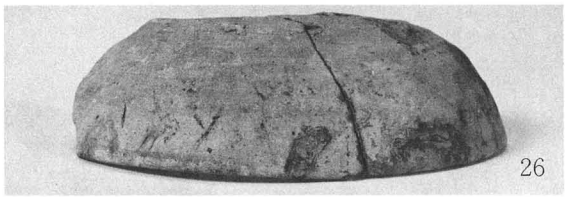

20

21

法　養　寺　遺　跡　出　土　遺　物

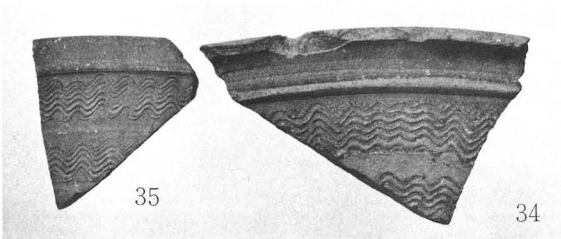

23

25

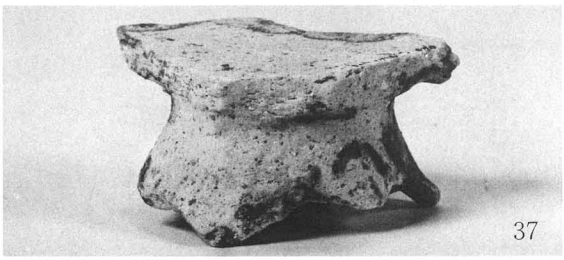

26

32

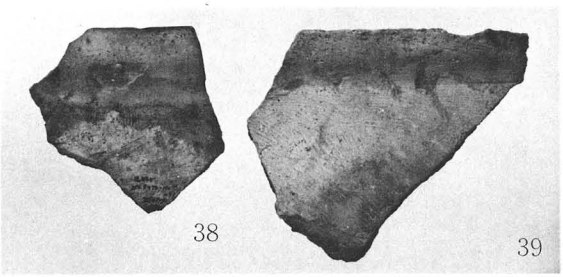
33


35

34


37

40


38

39

46

42

45

法　養　寺　遺　跡　出　土　遺　物

法養寺遺跡発掘調査報告書

—— 犬上郡甲良町 ——

1984年3月

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会
(財)滋賀県文化財保護協会

印　刷　明文舎印刷商事株式会社